

荷車と天狗さん (上氏家町)

今から六十年ぐらい前の話です。

鯖江の方から有定橋へむけて、帰りを急ぐ一台の荷車がありました。午後から降り出した雨は、次第に激しくなり、夕方には雨足が道路に叩きつけられるような大雨になりました。荷車を引いているのは、五十才ぐらいのおんさんです。その日、鯖江で用事を済ませ、これから上氏家へ帰るために、有定橋への坂道を登ってきました。

そのころの荷車はかな車で、小石につかえると止まったり、くぼみにはまと動けなくなったりします。そのうえ、雨も風も一段と激しさを増してきたので、やっとの思いで荷車を引きながら、おんさんは困り果てていました。

その時、突然高い下駄をはいた大男が、片手に傘を持ち、顔をかくすようにしながら現れました。



「おんさん、おんさん、おおごつちゃあの。けつ

(後ろ) から押してやるでなあ。」

と言つて、荷車の後ろにまわりました。その大男は、片手で傘を持ち、片手で荷車を押しているのですが、相当な力持ちとみえて、荷車は後ろからぐいぐいと押し上げられるように進みました。そのため、もう力を入れて引つ張る必要がなくなつたのですが、おんさんは、

「よいしょ、よいしょ。」

とかけ声だけは前よりも大きく、元気を出して荷車を引つ張りました。

間もなく、坂道の頂上の有定橋に着きました。もう後は下り坂で、楽に帰ることができます。おんさんは、荷車を止めてお礼を言おうと後ろにまわりましたが、さっきの大男はもういないのです。あたりを見まわしても、人影らしいものは全くありません。降りしきる雨は音を立てて、また激しさを加えてきました。おんさんは、暗くならない

うちに家へ帰ろうと、再び車を引つ張り歩きはじめました。

そして、荷車を押ししてくれた大男が、突然消えてしまったのは、とても不思議なことだと思ひました。

荷車をぐいぐいと押し上げてきたあの強い力を、おんさんははつきり感じていました。大男が荷車を押ししてくれたのは間違いないのです。なぜ消えてしまったのだろうか……。大きな傘でかくれるようにしていたので、おんさんは大男の顔をはつきり見ているはいながつたのです。

いろいろと考えながら、おんさんは家にたどり着き、家の者に今あつたことを話しました。そして最後に、こう言いました。

「あのいけえ男は、天狗さんや。鳥井の森の天狗さんか、有定の森の天狗さんか。どつちかの天狗やつたんにやなあ。」

その後、有定橋の天狗さんの話が出たかどうか

は知りません。その頃の有定橋をはさんだ両岸の道は、長くて急な坂道でした、西鯖江までは人家もなく、昼でも気味悪いさみしい道でした。

かな車は、大正十年ころ、この地方にも出まわったそうです。昔の荷車は、木で出来ていたので車輪の回りが長持ちするように、鉄の輪で止めてありました。そのため弾力性がなく、引つ張るとガラガラと大きな音を立てました。今は荷車をほとんど見ることがありません。天狗さんにとつても、もう出る幕はないということでしょう。

